

食でつなぐ日本と中南米

JICAは食文化を通じた日系社会・地域社会の活性化をテーマに研修を行ってきており、これをきっかけに活躍する人も数多い。

日系4世の常川真由美さんは、チリで和菓子を楽しめるカフェを営む。「小さい頃、日系人グループのおばあちゃんたちが作ってくれた練り切りや蒸しまんじゅうが大好きで、いつか自分で作りたいと思っていました」と常川さん。京都の和菓子店での修業やJICAの食ビジネスについての研修を経て、2018年に自身の店をオープンした。「伝統的な和菓子の世界を多くのチリ人に知ってもらいたい」と夢を語る。

15歳のときに家族とブラジルに移住した伊澤彩子さんはフレンチの料理人。子育てのかたわらパンの販売を始め、2001年に本格的な学びを求めてJICAの研修でル・コルドン・ブルー*3の日本校に通った。そこから順調にキャリアを重ねてブラジルレストラン界の第一線で活躍し、17年には「世界のベストレストラン50*4」の、中南米地域最優秀パティスリーシェフに選出。ブラジルの食材を日本人の感性で生かした洋菓子が高く評価された。「ブラジルの食文化は私の人生の一部」と話す伊澤さん。今後は「まだまだ知られていないブラジルの食文化の魅力を日本に伝える活動にも力を入れていきたい」と力強く語った。

*3 フランスの料理教育機関が展開する料理菓子専門学校。
*4 イギリスのレストラン専門誌「Restaurant」が主催するレストラン格付けと料理人の表彰。



常川さんお手製のあんみつ。

「作夢」オーナー
常川真由美
(つねかわ・まゆみ)さん



チリ・サンティアゴの「作夢」。

シェフ
伊澤彩子
(いざわ・さいこ)さん



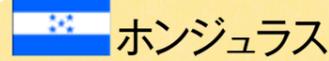
カンブシーという果実など、ブラジル各地方の食材7種類を使ったデザート。



ウェブで広がる学び合い

コロナ禍で人が集まる機会がウェブ上に移っている。JICAの研修を受けて母国へ戻った人々(帰国研修員)の同窓会がウェブ上でのセミナー=ウェビナーを開くなどして学びを深めている。日本の専門家も距離を超えて参加するなど、オンラインならではの展開を見せている。

Honduras



日本とホンジュラスの懸け橋

ホンジュラスではコロナ禍による在宅勤務の機会を活用して、ホンジュラス帰国研修員同窓会(AHBEJA)がウェビナーを開催。テーマはエネルギー、エコツーリズム、起業、生活改善などで、各研修員が日本で得た経験を伝えている。8月の時点で計10回開催され、参加者はホンジュラス国外も含めて平均40人。日・ホンジュラス外交関係樹立85周年関連事業として大使館からも認められている。なおAHBEJAは、これまでも柔道や日本語教育を広めてきた実績があり、外務省から表彰も受けている。

2019年度の同窓会総会に集まった帰国研修員同窓会幹部たち。



Mexico



子どもたちの心のケアを

メキシコでは新型コロナウイルスの感染拡大で、日々の生活に不安を抱える子どもたちが増えている。SATREPSプロジェクト*2の防災教育を通して、防災関係機関は子どもたちの心のケアの大切さを実感していた。そこで7月7日、災害時の子どもたちの心のケアに長年携わってきた専門家を日本から招き、教育現場でできることを考えるウェビナーを実施。メキシコ市や各地の学校関係者など6,788人が参加し、関心の高さがうかがわれた。



プロジェクトでは現地向けの教材を開発して防災教育を実施しており、心のケアに関する知識の普及は防災においても重要。

*2 地球規模課題対応国際科学技術協力「メキシコ沿岸部の巨大地震・津波災害の軽減に向けた総合的研究」。

Brazil



全7回で5,300人が集まる

若手の日系人が中核メンバーとなって、サンパウロ帰国研修員同窓会(ABJICA)、ブラジル国費留学生同窓会(ABRAEX)、レシフェ帰国研修員同窓会(ANBEJ)などがウェビナーを実施。これからの時代の“もの作り”の考え方、経営力の強化の方法、ブラジル北部アマゾン地域にある日本人移民が開拓したトマスの観光開発などについて話し合った。これまでに7回実施され5,300人が参加。登壇者のひとり自身自身が経営する会社でマスクの生産を開始し、地域の日系団体やJICAのサポートを受けてさまざまな機関に寄付を行っている。

7月に開かれたウェビナーでは日本の“もの作り”について話し合われた。



高齢者ケアの分野でも 帰国研修員の主導でセミナーを実施

メキシコ日系帰国研修員同窓会(ASENIM)は、2015年からメキシコの高齢者支援を考えるセミナーを政府機関と共催。高齢者を定義する法律の改訂や高齢者向け融資の実現に貢献してきた。20年2月には地域に根付いた高齢者ケアをテーマに、日本で地域医療に携わる医師と研究者を講師に迎えてセミナーを実施。メキシコ国内のみならず国際機関などから約160人もの関係者が参加した。ASENIMの会長、川辺準さんは「コロナ禍で高齢者ケアの必要性・重要性が認識されています。彼らが社会的弱者とならないように日本の知見を共有したい」と話す。21年2月には高齢者ケアに関するウェビナーも開催予定だ。



2月に開かれたセミナーの様子。

Argentina



ネットワークで域内の生産性アップ!

企業の品質・生産性向上を推進する20の機関が中南米地域の15か国から加盟する「ラテンアメリカ生産性ネットワーク」が、2020年から本格的に動き出している。5月から20年末までに16回、経営管理や生産性向上に関わるウェビナー会議を2週間ごとに開催する予定だ。第8回までの合計参加登録実績は約2,550人。コロンビア、ウルグアイ、アルゼンチンの機関がおもに講義を担当し、国を超えた交流が見所になりそうだ。



上：ウェビナー実施を告知するチラシ。
下：ラテンアメリカ生産性ネットワークの初回会合に集まったメンバーたち。

Bolivia



国を超えてよりよい発展を

中南米には各国の帰国研修員同窓会が参加するラテンアメリカ帰国研修員同窓会連合(FELACBEJA)がある。ボリビア帰国研修員同窓会は、この同窓会連合のネットワークを生かして国境を超えたウェビナーを積極的に実施。ホンジュラスやコロンビアとの間ではJICA海外事務所の現地採用スタッフも交えた勉強会を行っている。中小規模農家に向けた日本の「カイゼン」*1の手法の提案や、日本が培ってきた土砂災害の防止技術「SABO(砂防)」の考察をはじめ、医療や障害者ケアなど多くの分野で学び合いが続いている。

*1 日本の高度経済成長期に、おもに製造業で品質や生産性を上げるために培われた理念や手法のこと。

小規模農家の発展を考えるウェビナーの告知画面。域内の帰国研修員が力を合わせる。

